

授業改善アンケートを活用した「文章読解Ⅱ」の分析

A Practice Report and Analysis of “Reading Ⅱ” using Kobegakuin University end-of-term class evaluation survey.

清田 朗裕

(要約)

本稿では、論者担当の「文章読解Ⅱ」と共通教育科目全体の授業改善アンケートの結果を比較し、以下の2点を明らかにした。

1. 2014・2015年度における共通教育科目全体のアンケート結果は、授業内容を理解させること以外の能力向上の実感を、学生に十分には与えさせられていないことを示唆していた。
2. 2016年度の「文章読解Ⅱ」においてグループ活動中心の授業を実施した結果、他者理解に関する項目（「5 対人理解力」「6 相互学習能力」）の能力向上の実感を、学生に与えさせることができた。

以上により、グループ活動中心の授業は、学生に他者理解に関する能力向上を実感させる点において効果的であると考えられる。

キーワード：文章読解，授業改善アンケート，グループ活動，他者理解

1. はじめに

神戸学院大学では、「文章読解」という科目が開講されている。共通教育科目リテラシー科目群基礎思考分野に属するものである。1年次後期にあたる第2 Semesterから、3年次後期にあたる第6 Semesterまで、「文章読解Ⅰ～Ⅴ」という名称で開講されている¹。

本稿では、まず神戸学院大学のAP（アドミッション・ポリシー）とDP（ディプロマ・ポリシー）を確認した後、授業改善アンケートの結果をもとに、現在の神戸学院大学の共通教育科目において学生に十分に身につけさせる段階まで至っていないと考えられる点を、今後解決していくべき課題として提示する。そのうえで、論者が担当した2015年度・2016年度の「文章読解Ⅱ」の授業改善アンケートを例に、どのような展開を意識した授業を今後実施していけば、課題が解決できるのか提案する。結論を先取りすれば、異なる意見が出やすいグループ活動を重視した授業を実施することによって、他者理解に関する課題の一部が改善できると主張する。

2. 神戸学院大学と共通教育科目の関係について

2.1. 神戸学院大学全学におけるAPとDP

神戸学院大学は、兵庫県神戸市にある文理融合型私立総合大学で、2016年に大学創立50周年を迎えた。2016年現在、ポートアイランドキャンパス、有瀬キャンパスという2つのキャンパスをもつ、9学部・7研究科、学生数1万人程度の規模の大学である。

神戸学院大学の建学の精神は「真理愛好・個性尊重」であるが、これに関して、神戸学院大学教育開発センター（2016）で述べられているAPの中で、次のような説明がある。

- (1) 神戸学院大学の建学の精神「真理愛好・個性尊重」とは、「学びと知の探究を通じて、普遍的な学問体系の英知に触れる喜びを実感し、その過程で自己と他者の個性に気づき、お互いの存在をこよなく尊重できる」ことです。この建学の精神を神戸学院大学での様々な活動を通じて体得していくことができる人を求めています。

（神戸学院大学教育開発センター 2016：3，下線部は論者による）

APとは、神戸学院大学の入学者受入れの方針のことである。ここから、神戸学院大学は、他者を尊重できる（できるようになる）受験生を受入れる方針であることがわかる。この他者との関係を重視する方針は、神戸学院大学の全学DPからも窺える。

(2) DP（ディプロマ・ポリシー）

1. 幅広い知識に基づいて、他者および異文化を理解することができる。
2. さまざまな問題を発見し、それを解決する方策を導くことができる。
3. 生涯にわたって学び続けることができる。
4. 獲得した知識や技能を社会に役立てることができる。

(ibid. : 3, 下線部は論者による)

DPは、神戸学院大学の学士課程教育における卒業認定・学位授与の方針のことである。卒業認定・学位授与の方針にも、下線部にあるような他者理解に関する項目が挙げられている。以上のように、神戸学院大学の学生は、他者理解の探求も求められている。

2.2. 共通教育科目・基礎思考分野の位置づけ

共通教育科目と「文章読解」を含む基礎思考分野の位置づけは、(3)、(4)からおおよそそのことが窺える。

- (3) 簡単に言いますと、このカリキュラム（論者注：共通教育カリキュラム）は、みなさん個人個人が抱えている希望や願望を実現する土台づくりのために必要ですが、もっと大きな普遍的な価値である「真理愛好、個性尊重」という本学の精神を実現するためのものでもあります。

(神戸学院大学共通教育センター 2015 : 4, 下線部は論者による)

- (4) 大学での専門教育の基礎となる学習スキルの習得、社会へ旅立つ上で不可欠な基礎学力の養成に効果的な科目群

(ibid. : 9, 下線部は論者による)

下線部から、共通教育科目における学修が、建学の精神である「真理愛好・個性尊重」を実現するという目標を含んでおり、基礎思考分野は社会へ旅立つ上で不可欠な基礎学力を養成することが求められていることがわかる。

3. 問題の所在

2.1.・2.2.節で、神戸学院大学の方針、およびそれにもとづく共通教育科目が重視する目標に、他者理解があることを確認した。しかし、実際に共通教育科目を通じて、その目標が達成できているのか否かについては、明らかでない。またその達成が不十分であった場合、共通教育科目担当教員はどのように授業を改善していくべきであろうか。巨視的には共通教育科目全体の課題として、微視的には一人一人の教員の授業実践の課題として考えていかねばならない問題である。

4. 調査方法

本稿では、共通教育科目の授業を通して、学生の他者理解への意識が向上したかどうかについて調査し、今後、共通教育科目がどのようなスキルを学生に身に付けさせていくとよいか、考察する。

調査資料として、神戸学院大学全体で実施されている授業改善アンケート²のうち、共通教育科目で実施されているものと、論者が毎回の授業の終わりに提出させたミニッツペーパーにみえる学生の記述を採用する。

まず共通教育科目全体の授業改善アンケートの全体の結果は、神戸学院大学のHP上に、2014年度前後期、2015年度前後期が公開されているため、それを活用する。共通教育科目全体のアンケート結果の分析も必要ではあるが、本稿で特に確認したい項目は、「Q14 能力・技能・知識などの向上について」であるので、それに限定する。なぜなら、この項目から、学生が授業を通してどのような能力を身に付けることができた実感しているか、その傾向を窺うことができるからである。具体的には「1 情報収集能力」「2 分析力」「3 目標指向性」「4 判断力」「5 対人理解力」「6 相互学習能力」「7 自立性」「8 真面目さ」「9 意欲」の9項目である。他者理解に関する項目もここで取り上げられているため、この結果を参考にする。そして、毎回提出させたミニッツペーパーの記述は、受講生の生の声を知る資料として活用する。

なお、各授業の詳細なアンケート結果は、各担当教員が、神戸学院大学HPの教員用サイトから閲覧・ダウンロードすることが可能である。一般には公開されていない³。本稿では、これらを活用し、学生がどのような面を学修できたと感じているか調査し分析する。

5. 調査結果

5.1. 2014・2015年度授業改善アンケート全体の結果

2016年度の授業改善アンケートは公開されていないため、すでに公開されている2014年度前後期・2015年度前後期における授業改善アンケートの結果を整理する。本稿では特に「Q14. 能力・技能・知識などの向上について」を取り上げる。Q14は、前述の通り、「1 情報収集能力」「2 分析力」「3 目標指向性」「4 判断力」「5 対人理解力」「6 相互学習能力」「7 自立性」「8 真面目さ」「9 意欲」に関する質問項目である。授業改善アンケートは、それぞれの項目について、その能力・技能・知識などが向上したと実感するようになったかどうかを4項目以内で回答するよう尋ねている。したがって、特に実感をもった項目が選択されていることになる。なお、授業改善アンケートの用紙には詳細な説明がないため、学生は、各項目について、一般的な言葉の理解に基づき回答していると考えられる。アンケートの結果を、次頁の表1・図1に示す。

表1・図1によれば、全体の結果の平均値は21.6%である。これを基準にすると、1・2・8・9の項目は平均値を上回る一方、3～7の項目は下回っていることがわかる。

1・2の「情報収集能力」「分析力」は、一般的な理解にもとづけば、学生が、さまざまな情報を収集したり分析したりする能力が身についたと感じているかどうかを表すものである。また、8・9の「真面目さ」「意欲」は、受講生が、授業に積極的であった（もしくは積極的な姿勢が身についた）と感じていることを表すものである。ここから、共通教育科目の授業を受講した学生自身は、その授業を通して、論理的思考力や、授業そのものの取り組み方について、授業を通じておおむね向上することができたと感じていること

がわかる。

表1 2014・2015年前後期の授業改善アンケートQ14の結果(単位：%)

回答時期	2014年度前期		2014年度後期		2015年度前期		2015年度後期		合計 (人)	平均 (%)
	人	%	人	%	人	%	人	%		
母数・割合	20145	100.0	16857	100.0	20557	100.0	16918	100.0	74477	100.0
1 情報収集能力	6453	32.0	5397	32.0	6546	31.8	5421	32.0	23817	32.0
2 分析力	4917	24.4	4456	26.4	4776	23.2	4225	25.0	18374	24.8
3 目標指向性	3032	15.1	2277	13.5	3141	15.3	2534	15.0	10984	14.7
4 判断力	3373	16.7	2877	17.1	3319	16.1	2935	17.3	12504	16.8
5 対人理解力	3136	15.6	2276	13.5	3232	15.7	2570	15.2	11214	15.0
6 相互学習能力	2979	14.8	2311	13.7	3017	14.7	2650	15.7	10957	14.7
7 自立性	2606	12.9	2261	13.4	2668	13.0	2158	12.8	9693	13.0
8 真面目さ	5377	26.7	4744	28.1	5331	25.9	4913	29.0	20365	27.5
9 意欲	7439	36.9	5841	34.7	7345	35.7	5926	35.0	26551	35.6
平均値	4368.0	21.7	3604.4	21.4	4375.0	21.3	3703.6	21.9	16051	21.6

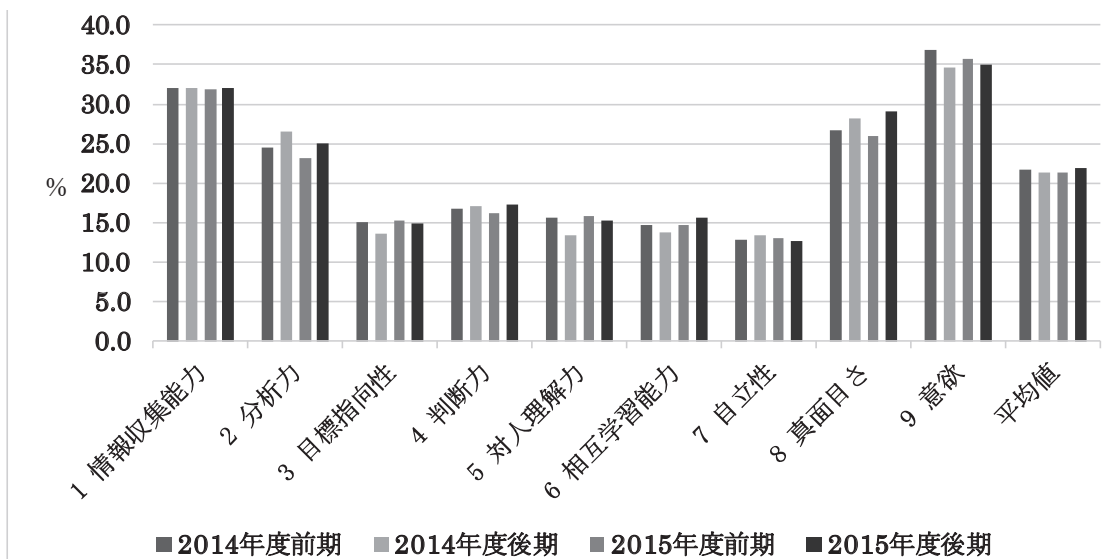


図1 2014・2015年度の授業改善アンケートQ14の結果(単位：%)

一方、3～7の結果は、全体的にその能力向上が不十分だと感じていることが窺えるものであった。3の「目標指向性」は、授業到達目標に向かって学修できたかどうかを尋ねる項目であり、4の「判断力」は、学生が、授業を通じて、物事の是非や価値について、より適切に判断できるようになったかどうかを尋ねる項目である。5・6の「対人理解力」「相互学習能力」は、共に他者との関係を尋ねている点において、他者理解、対人関係スキルに関する項目だといえる。7の「自立性」は、自分自身の責任において思考・行動す

るといった、自立的な態度が身についたかどうかを尋ねる項目である。

このうち、5・6は、授業内容に関わる項目（1・2）や授業に対する意欲・関心に関わる項目（8・9）とは、趣が異なるものである。なぜなら、5・6は、授業内容そのものの理解や個人の積極性ではなく、授業という「場」において、他者である周囲の学生とよりよい関係を構築しつつ活動できたと感じているかどうかを尋ねているものだからである。ここで一点補足しておく、7も、5・6同様、他者が関わっている項目である。なぜなら、自立性の高さは、他者依存の割合が小さいということを含意するからである。ここから、7にも他者理解が関係していることになる。ただし、ここで注意しなければならないのは、5・6と7は相反するものではないということである。その理由は、対人関係スキルが、独りよがりの考えや、自ら思考することを放棄し、他者に依存するという態度から脱し、他者と適切な距離を保ちつつ生活していく技能であるからである。このことから、他者理解を深めつつ、自立性をも身につけさせることが、授業を通じて教員が目指していきべき姿だと考えられる。

以上のことから、共通教育科目で実施されている授業を通して、学生は、個人の能力・技能・知識に関する項目については向上したという実感をもっているのに対し、周囲の学生との関係、すなわち他者理解・対人関係スキルに関する項目については、その向上が不十分だと感じていることが窺える。したがって、共通教育科目全体の課題として、他者理解・対人関係スキルに関する項目は、今後改善していかなければならない対象だと考えられる。

5.2. 2015・2016年度「文章読解Ⅱ」の授業改善アンケートの結果

論者は、2015年度・2016年度の「文章読解Ⅱ」を担当した。2015年度は、初めて担当することもあり、前年度担当者作成のシラバスを参考にし、講義中心の授業を展開した。そこでは、毎回のミニツツペーパーの内容や、授業改善アンケートの結果をみても、ある程度の成果が得られたと考えている。その一方、授業内外の質疑応答の中で、受講生の人生経験の有無また多少が、課題の理解度の向上に大きく影響を与えているように思われた。つまり、授業を通じて身につけた読解能力よりも、実社会でさまざまな経験を通して得た知識のほうが、課題の理解度向上に貢献しているのではないかと思われたのである。

そこで2016年度は、授業を通して文章読解能力が向上したと学生に実感してもらうため、シラバス作成以前に行った「文章読解」の授業担当者⁴による打ち合わせなどを参考にし、論者の授業をグループ活動中心の授業に変更した⁵。実際の授業では、まず、文章そのものを段落毎に読み取らせた後、その内容をグループ活動として話し合い確認させる。そのうえで、それに関する具体例を考えさせるという形式をとった。具体例を考えさせ話し合わせることによって、文章内容や自分一人では獲得できない知識や考え方を共有してもらおうとしたのである。

以下に、シラバスと各回の授業展開の概要を示す。なお、文章読解担当教員による打ち合わせを通して、受講生には、はじめに文章読解とはどのようなものかを考えさせ、その後、他者理解について考えさせるという順序で実践することになったため、課題文の主題

もそれに合わせた文章を取り上げるようになった。具体的には、「学び」「セルフコントロール」「異文化理解」「人間関係」「コミュニケーション」である。

表2 2016年度「文章読解Ⅱ」シラバス(抜粋)

講義番号	主題	内容
第1回	ガイダンス・読解力	受講者の確認と、授業の概要、受講上のルールを説明します。その後、「読解力」をテーマにした文章を読み、理解を深めます。
第2回	学び1	「学び」をテーマにした文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第3回	セルフコントロール1	「セルフコントロール」をテーマにした文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第4回	異文化理解1	「異文化理解」をテーマにした文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第5回	人間関係1	「人間関係」をテーマにした文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第6回	コミュニケーション1	「コミュニケーション」をテーマにした文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第7回	中間試験1	中間試験1を実施します。
第8回	学び2	「学び」をテーマにした高度な文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第9回	セルフコントロール2	「セルフコントロール」をテーマにした高度な文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第10回	異文化理解2	「異文化理解」をテーマにした高度な文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第11回	人間関係2	「人間関係」をテーマにした高度な文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第12回	コミュニケーション2	「コミュニケーション」をテーマにした高度な文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第13回	その他	受講生の興味に従って、それに関する文章を読み、理解を深めます。グループ活動を行います。
第14回	中間試験2	中間試験2を実施します。
第15回	全体のまとめ	中間試験の結果を返却します。その後、期末試験に関する説明を行います。

以下の表3におおよその授業展開と時間配分を示す。

表3 毎回の授業展開

分	授業展開
10分	小テスト（漢字語句）
55分	課題文を段落毎に分け、個人で読ませ、読み取った内容を配布プリントに書かせる。その後、班でどのような内容であったかを確認させる。課題文を読み終わるまで繰り返す。
15分	課題文に関する問題を解き、答え合わせをする。
10分	全体のまとめと、ミニツツペーパーに学修内容や感想等を書かせる。

授業では、毎回4～6名のグループをつくらせた。トランプを用い、ランダムにグループを決めたが、一部、学習環境に関する課題文を扱う際、実際に体験してもらうことを意図し、論者がグループを指定した。具体的には、課題文では同程度の学力や考え方をもつ者同士だと会話が弾みやすいことが述べられていたため、すでに実施していた中間試験の結果をもとにグループ分けをおこない、実際に課題文の通りになるかどうか確認させた。ただし、そのことを授業開始直後に伝達すると学生の興味・関心が薄れるであろうことを踏まえ、授業開始時はこのグループ分けの意図を伏せ、授業終了直前の全体のまとめの中で、文章内容と関連づけたグループ分けであったことを告げる、という工夫も行った。

授業プリントは、毎回A3判用紙2枚を用意した。まずA3判用紙を二つ折りにし、その左側を1ページ目として、横書きで課題文を掲載し、右側の2ページ目に段落毎に何が述べられていたかを整理させるための空欄のマスを用意した。A3判用紙にしたのは、文章の文字の大きさや、受講生の記入スペースを十分に確保するためである。次に2枚目に、課題文に関する問題を載せたプリントを用意し、それをグループ活動後に解かせ、解答を記入させる。解答欄には、ミニツツペーパーとは別の感想欄も設け、問題の難易度や、受講生が自分なりに理解できたことを記入させた。

このように、2015年度では講義中心であった授業を、2016年度ではグループ活動を中心とした授業へ変更した。その成果や課題は、以下に示す授業改善アンケートの結果や毎回のミニツツペーパーの記述から窺うことができる。

まず、2015・2016年度の「文章読解Ⅱ」における授業改善アンケート（Q14）の結果を表4・図2に示す。

表4 2015・2016年度「文章読解Ⅱ」の授業改善アンケート（Q14）の結果（単位：％）

回答（％）	2015年度	2016年度
1 情報収集能力	34.8	39.4
2 分析力	34.8	36.4
3 目標指向性	13.0	12.1
4 判断力	21.7	21.2
5 対人理解力	8.7	51.5
6 相互学習能力	13.0	45.5
7 自立性	13.0	0.0

8 真面目さ	26.1	27.3
9 意欲	39.1	21.2
平均値	22.7	28.3

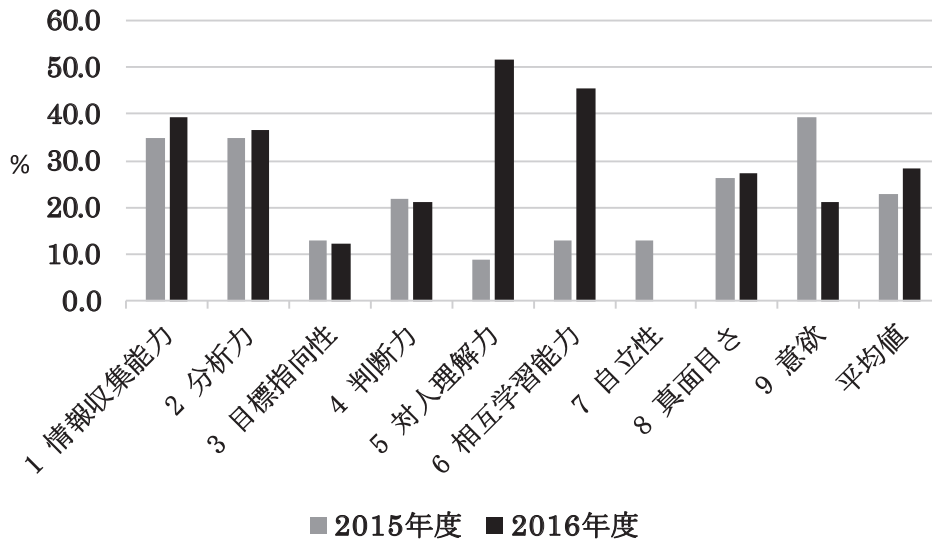


図2 2015・2016年度「文章読解Ⅱ」の授業改善アンケート(Q14)の結果(単位:%)

2015年度は受講生全24名中23名(95.8%)が、2016年度は受講生全40名中33名(82.5%)が回答した。本授業は一度単位を取得すると受講できないものであるため、受講生に重複はない。母数に差があるため、表4・図2では、割合で示す。

表4・図2からわかることは、まず、1～4・8といった、講義形式でも十分取り組むことができる部分については、ほぼ変化していないことである。ここから、2015年度に講義形式で取り組んでいた部分が、2016年度では不十分なものになったという可能性は低いと考える。そこで次に、他者理解・対人関係に関わる部分について注目していく。

論者が担当した2015年度と2016年度の「文章読解Ⅱ」の結果を表4で比較すると、他者理解・対人関係の項目である「5 対人理解力」は、8.7%から51.5%に、「6 相互学習能力」は、13.0%から45.5%にそれぞれ増加しているといえる。表1で示した2014・2015年度の共通教育科目全体における授業改善アンケートの結果が、それぞれ15.0%、14.7%であったことからしても、2016年度の「文章読解Ⅱ」の結果は、大幅に向上したといえる。

ただし、「7 自立性」と「9 意欲」については、2015年度の「文章読解Ⅱ」と比較すると、それぞれ13.0%から0.0%、39.1%から21.2%というように減少しているといえる。この理由として考えられることについては、後述する。

6. 成果と今後の課題

2016年度の「文章読解Ⅱ」の授業改善アンケートの結果は、共通教育科目全体、また2015年度のそれと大きく異なる点が認められた。それは、Q14「5 対人理解力」「6

相互学習能力」の数値である。この理由は、授業改善アンケートの結果と、後述するミニッツペーパーの記入内容から、以下の点が影響を与えたからだと考える。

- (5) グループ活動を中心として授業を行ったことで、課題文について、自分の頭で考えるだけでなく他者に説明する機会が増加したこと。
- (6) 他者に説明するためには、その根拠となる表現やその背景についても考えて説明する必要がある、その分、個人で読解するよりも深く思考するようになったこと。また同様に深く思考した班員の意見を聞くトレーニングができたこと。
- (7) 具体例を考え、発表し合うことで、課題文の例だけでなく、他者の人生経験を踏まえた話を聞くことができ、その内容を自分自身の読解力の基礎となる知識や擬似体験に昇華することができたこと。

受講生は、一人で読解していく学修に比べ、グループ活動によって、読解力向上のために必要な基礎的知識や経験についてより多くのもをを獲得することができ、その過程において、「対人理解力」「相互学習能力」をも向上させたと考える。

そもそもグループ活動の利点は、自分一人の人生経験だけでは補うことができない知識や経験を、他者の言動から（擬似的に）獲得し、また、他者に与えるという相互理解活動が可能であり、またその過程において、コミュニケーション能力の向上を見込める点にある。特に、共通教育科目は、学部を超えた受講が可能であるため、ある意味異質な存在が入り混じる学修の場となっており、効果的な活動が期待できる。

ここで、実際を受講生によるミニッツペーパーの記述の一部を挙げる。

- (8) グループ学習をやってみて自分の考えだけでなく周りの人の意見を聞くことで、自分と違うことを考えている人がいて、こんな考え方もあるんだなと思いました。自分はグループワークがあまり得意ではないですが、これを機会に少しずつ慣れていきたいです。(第2回)
- (9) 基本的に文章の言葉を自分の理解しかみ砕いた文にしようとするとき、本文の言葉を使わないようにすると内容が変化する気がするので変えないようにしていたが、横の人は自分の言葉でまとめていたので真似すべきかなと思った。(第2回)
- (10) グループワークを行うことで、自分の考えつかないものや意見を班員が出してくれることで新しく知識が増えた気がします。ワーク1回目ということもあり、自分から発言をすすんでできなかったのが、来週から積極的に発信できるように頑張りたいです。(第2回)
- (11) グループワークを通じて、色々な人から意見が出てきて考え方の広さを知ることができました。また、意見交換によって自分がどう考えているのかも理解できた。(第3回)
- (12) 人はみなそれぞれいろんな別々の考え方があって、自分では普通に思っていることがまわりではちがうかったり、おもいつかなかったことが他の人からしたら普通の

- 考えだったりするというのが、「フラストレーション」についての話し合いでも感じた。考え方一つで世界の見え方が変わってくるんだなと思った。(第3回)
- (13) この授業も4回目ですが、グループワークをすることは、とても大切なことだなと思うようになってきました。分からなかった場所や理解できなかったときに、班の人に聞いたりして理解を深められるので、一人で問題を解くより複数でやるとはかどっていいなと思いました。(第4回)
- (14) グループワークでは多数決にならずに、それぞれが意見を言って一つの答えを決めたので良かった。(第9回)
- (15) 全員で内容を理解しながら進めていくと、他の人の意見などもきけて自分の視野が広がったと思います。自分で理解できなかったことを他の人の意見をきくことで納得できることもありました。(第9回)

受講生は、グループ活動そのものや課題文の理解について好意的な評価をもっていることが窺えるが、それだけに留まらず、意見交換によって、自分自身の考えを、より深めることができている者もあり、興味深い。一人で読解するのでは、このような意見は出てこないため、受講生自身が、グループ活動を効果的に活用した結果だと考えられる。

ただし、勿論、良い面ばかりではない。「7 自立性」「9 意欲」については、2015年度の「文章読解Ⅱ」の授業に比べ、13.0%から0.0%、39.1%から21.2%へそれぞれ減少している。これはどう考えることができるだろうか。

この点については、以下に挙げるミニツツペーパーの記述を参考にすると、グループ活動に対する消極的な姿勢や授業中の態度およびグループ活動そのものが非活発であったことが影響を与えていると思われる。つまり、グループ内で、文章内容をよく理解している受講生ばかりが発言してしまい、あまり理解できなかった受講生は、その意見に追従するのみで自分の意見を述べず、他者任せになってしまっていたということである。また、以下に示すように、授業の始めから消極的な態度で授業に臨んでしまっているグループも認められた。

- (16) 本日の講義はグループワーク中心でしたが、あまり自分の意見を述べられませんでした。ですが、あいづちなどをうてるように頑張りました。次は頑張りたいと思います。(第2回)
- (17) 今回のグループワークでも、あまり自分から発信していくということができませんでした。グループを仕切ってくれた子に頼りっぱなしだったり、話が盛り上がりなかつたり、申し訳なく思います。班員としっかり意見交換できるようにならなければダメだと感じました。(第3回)
- (18) グループワークは、意見を出しても誰も書いていなくて話す気が失せました。皆聞き取れないスピードと声の大きさと話す。つまらない。こんな日もありますか。私も含め皆能面でした。今日は元気がなかったけど、次頑張ります。(第7回)

このような受講生の記述から、彼らが授業に消極的な姿勢で臨んでいた時があったことが窺える。このことは、当然、論者の授業展開の不味さや助言内容に問題があったと考えられる。現時点ではよい解決策を見出せていないが、まずは彼らが消極的であった理由を検討し、それについて対策を講じていくことが必要であろう。消極的な受講生を減少させ、彼らの「自立性」向上に向け適切な助言が行えるように、教員自身も切磋琢磨していかなければならない。この「自立性」の向上が見られなかった点は、論者による2016年度「文章読解Ⅱ」の授業の大きな反省点である。

7. おわりに

本稿では、2014・2015年度の授業改善アンケートの結果をもとに、共通教育科目において十分に達成できていないと考えられる能力・技能・知識などの項目を洗い出した。その結果、他者理解・対人関係スキルに関する項目が不十分であることが分かったため、その解決のために、グループ活動による授業を組み立て、論者担当の2016年度「文章読解Ⅱ」で実践した。その授業改善アンケートの結果分析から、他者理解についての項目が向上していることが確認できた。実際にその能力が身についたかどうかについては、アンケート以外の調査が今後必要となってくるであろう。とはいえ、学生自身が、他者理解の向上について実感をもったこと自体については、今後の授業改善に繋がる成果として評価できると考える。

他者理解は、神戸学院大学全体でも目指していくべきところであり、それを意識した授業内容を充実していくことが必要だと思われる。

異質な考えを持つ者同士が一つの課題に向き合い、それぞれの観点から読解した内容を話し合う。この活動は、学部を超えた受講が可能な共通教育科目ならではのものであり、専門科目では達成しにくい面があると考えられる。そのため、学部を超えた受講生を相手にした場合の有効な教授法の開発が必要であろう。論者に限って言えば、「文章読解」の授業を実践するうえで、適切なテキスト選定、問題作成といった課題もある。これらについては、LTD話し合い学習法やPBLといった教授法も参考にし、今後、考察していきたい⁶。

謝辞

本稿で取り上げた授業展開は、神戸学院大学の「文章読解」担当教員の打ち合わせの中で、どう授業改善を図っていくかという課題について議論したことがもとになっている。個々の打ち合わせにおいては岡村裕美氏、辻野あらと氏、西口啓太氏との議論が参考になった。特に課題文の選定については、辻野氏の助けが大きかった。「文章読解」科目全体については、中原香苗氏の援助があった。また、匿名の査読者には、事実関係の基本的な誤りや、形式上の注意点等についてご指摘いただき、可能な限り修正することができた。あわせて、ここに記し感謝申し上げます。

注

- 1 「文章読解」の授業については、すでに中原（2015；2016）のような実践研究がある。
- 2 ただし、アンケートの内容は、各学部によって異なるため、学部間での単純な比較は難しい。
- 3 2016年10月31日現在。
- 4 有瀬キャンパスで「文章読解」を担当する教員のうち、以下の4名による打ち合わせである。
岡村裕美氏、辻野あらと氏、西口啓太氏、そして論者である。
- 5 この内容は協力的に活動する「協同」による学修を指向したものである。後述する「自立性」の項目を向上させるためには、一人一人が自分の発言に責任をもつ「協働」による学修も目指さなければならない。今後の課題である。
- 6 安永（2006）など。

参考文献

- [1] 神戸学院大学教育開発センター（2016）『FDC Newsletter』No.19, 神戸学院大学教育開発センター
- [2] 神戸学院大学共通教育センター（2015）『共通教育はやわかり 2015』神戸学院大学共通教育センター
- [3] 神戸学院大学 HP（<https://www.kobegakuin.ac.jp/>, 2016年10月31日取得）
- [4] 中原香苗（2015）「『文章読解』における授業外語彙学習の取り組み」『教育開発センタージャーナル』6, 神戸学院大学教育開発センター, pp.91-101
- [5] 中原香苗（2016）「『文章表現』『文章読解』における検定実施報告と結果分析—学生の能力把握の一助として—」『教育開発センタージャーナル』7, 神戸学院大学教育開発センター, pp.11-19
- [6] 安永悟（2006）『実践・LTD 話し合い学習法』ナカニシヤ出版